

## 発掘調査の概要

### 石神遺跡東方の調査（飛鳥藤原第209次）

奈良県明日香村に位置する石神遺跡は、明治35年（1902）および翌36年（1903）に須弥山石・石人像が発見された地として知られています。奈良文化財研究所は、昭和56年（1981）以来、21回以上にわたる発掘調査をおこない、7世紀を中心に建物、石敷広場、石組池、井戸、石組溝等の施設を配した遺跡であることをあきらかにしてきました。遺跡の時期は3時期にわかれ、内部の建物は時期ごとに何度も造り替えられたことも判明しています。

一般的に、石神遺跡といえば、須弥山石・石人像や石敷広場、新羅土器や東北系黒色土器等の出土から、『日本書紀』に記される齊明朝の饗宴施設として注目されがちですが、近年の調査研究により、飛鳥淨御原宮期の具体像もあきらかになってきています。また、石神遺跡の東側を推古朝小墾田宮の推定地とする説も示されています。

このように、石神遺跡については多くの研究成果の蓄積がありますが、遺跡のさらなる解明のため、石神遺跡とその周辺における土地利用の実態解明を目的に、継続的な調査をおこなうこととしました。初年度となる今回は、第1次調査区のすぐ東に301m<sup>2</sup>



調査区全景（東から、道路を挟んで画面上が石神遺跡  
第1次調査区）

の調査区を設けて調査を実施しました。第1次調査は昭和56年（1981）に実施していますので、この地区での発掘は実に40年ぶりとなりました。

調査の結果、飛鳥淨御原宮期の掘立柱塀と溝を50mにわたって検出しました。掘立柱塀の柱穴は、一辺70~80cm、深さ45~70cmの隅丸方形をしています。計24基の柱穴が約2.1mの間隔で東西一列に並びます。この塀の南に並行して延びる東西溝は幅2m以上、深さ約0.6mで、石神遺跡のなかでも大型の溝が掘られていたことがわかりました。この塀と溝は西の第1次、第3次調査区から続くもので、東はさらに調査区外へと延びています。今回の調査で、実に85m以上もの長大な区画施設が石神遺跡南端にあったことが判明しました。

これらのほかに、調査区東半では弥生時代の土坑1基、調査区中央と西端で古墳時代中期とみられる竪穴建物4棟、斜行溝1条を確認しています。また、調査区東端では、前述した飛鳥淨御原宮期の掘立柱塀よりも古い掘立柱建物も確認したほか、<sup>ふいご</sup>轍の羽口や鉄滓、炭を多く含む土坑が点在しており、近隣での金属器生産が推定されます。今後、整理作業を通じてその性格を詳しく検討していくますが、少なくとも弥生時代以降、この地が継続的に利用されていたことを示す成果を得ることができました。

今回の調査により、飛鳥淨御原宮期の石神遺跡は従来考えられていた範囲よりもさらに東へ広がることがわかりました。今回判明した長大な区画施設の内側には、どのような施設があったのでしょうか。石神遺跡最盛期とされる齊明朝の様相や、南に位置する飛鳥寺との関係等、周辺の調査が進んだ今だからこそ解明すべき課題は多いといえます。石神遺跡東方の調査は始まったばかりです。今後の調査にご注目ください。

（都城発掘調査部 松永 悅枝）



掘立柱塀の柱穴と東西溝の堆積状況（西から）